

も5世紀中・後半には成立していたようである。

新羅国に始まった新羅は、慶州市の南側に該当する西南山ふもとに最初の都市を形成し、しだいに南山の北東側に移動し始めて、月城とその周辺に移されており、ふたたび皇龍寺西側と月城北西側に拡大したものと推測される。

新羅初期の宮闕は、金城、月城、満月城、明活城であったようであるが、このうちで、新羅初期から最後まで正宮として使用されたというものは、王京の中心に位置している月城であった。

都城地域に分布した新羅時代の寺刹数は、203ヵ所と知られており、30余ヵ所程度が三国時代に創建されたものであり、大部分が統一新羅時代に造営された。新羅の代表的な寺刹である皇龍寺址とこの寺東辺塀脇の発掘調査においては、建物址と道路遺構、井戸等、王京の一面を明らかにすることができたが、現在では、1坊の規模は、長さと幅が140m～160mであったものと推定される。

結論的に、新羅の都城制は、中国・日本の古代都城制に見られる定型化された都市計画とは差異があると考えられる。一例として、新羅にも、当時、中国都城制の影響により城東洞建物址<殿廊址>が創建されたが、新羅においては、正宮でない別宮として創建された差異がある。また、これを中心として、王京は左京と右京に区分されたという見解もあるが、現在では、新羅王京における左京・右京の区分はなかったとみられている。その他に、高句麗・百済の後期都城にある羅城が、新羅には存在せず、代わりに周囲の山城がこれに代わったという点と、王京の中心に配置される朱雀大路がない差異がある。そして、坊の大きさが前代の構造物等を勘案して決定したものであるため、一定の規模でないという点は、東アジアの各国の都城制と大きく異なる点である。その理由は、一個の国の首都として位置を占めるには、平地の面積が非常に狭く、すでに古墳、寺刹、貴族の大邸宅がいくつも密集していたため、これを施行することができなかったものと考えられる。

## 【コメント】

東 潮

**新羅王京の呼称** 『三国史記』や『三国遺事』に、「金城」、「金京」、「大京」と記されている。新羅における王京の成立、坊里制の施行時期、さらに明活山城や南山新城などの山城の出現時期などに関連して、新羅王京をどのように位置づけるか問題となろう。

**慶州盆地の地勢と王京の立地条件** 北川・西川・南川の旧流路の復元問題。南川は新羅時代に改修され、とくに月城周辺は堤防工事もなされ、そこに「月精橋」・「日精橋」に比定される橋梁が存在する。西川は西京極とかかわる。北川は現在、「北宮」推定地の城東洞遺跡の東北部を流れる。また芬皇寺東北側は現在堤防がつくられている。その東側で、苑池や建物が発掘された。したがって北川はそれらの北側を流れていたことはたしかである。昭知王18年(496)の北川の洪水記事などに言及し、現在の北川北側の東川洞一帯を王京城と想定されている。新羅時代の北川、あるいは北川の旧流路の復元的研究は不可欠である。

**王京の範囲** 東は狼山からさらに東側の普門寺跡まで地割りの痕跡をみとめられているが、

狼山東麓の皇福寺跡に隣接して、十二支像石刻を圍繞した皇福寺東方墳墓（8世紀）が立地する。新羅時代には、唐代にならった、京城内への埋葬の禁忌という葬礼があったと考え、京城外の墳墓をあげているが、皇福寺東方墳墓については言及されていない。遺存地割の時期の検討が必要で、なかには後世の可能性がないかどうか。南東部の地割も同様である。

**道路遺構と都市計画の成立時期** 慶州博物館敷地内で発掘された東西道路が溝によって切られ、その溝内から4世紀末から5世紀中葉の新羅土器が出土したことから、その時期のものと考えられている。東西道路に直交する南北道路は幅23m以上の大路で、「王京大路」と考えられている。そして朱雀大路（南北大路）については、月城の位置関係や南北大路じたいが、城東洞や善徳女商高校で発掘された道路遺構から否定する。王京の南側は南山であり、北宮と苑池（臨海殿）・東宮、月城をむすぶ道路は発掘されている。大路としての「朱雀大路」は施工されなかったか、あるいは慶州博物館敷地の南北道路（王京道路）が中心道路となるのかどうかである。

**王京の構造** 新羅王京の人口・坊里について、『三国遺事』巻1の「十七万八千九百三十六戸一千三百六十坊五十五里」、『三国遺事』巻5の「三百六十坊十七万戸」の戸数は人数で、十七万人で、坊里は360坊と解釈する。ただその360坊自体の実態についてはふれていない。つまり360坊と解釈すると、ある時期それに相当する空間があったはずである。羅城の存否問題と関係する。京極は土城や石城ではなく、塙垣と壕（水路）で画されていたのであろう。1坊の規模は140～160mと推定されている。筆者の坊里復原では、南北9坊、東西10坊で、1坊（320.4m四方）は4分割されているので、360という数値がえられる。「五十五里」については成案をえていない。7世紀末、360坊里からなる空間が存在したにちがいない。

宮闕配置について、月城とそれを取りまく宮域を想定される。かつて「満月城」と称されたことがある。城門には北門や玄武門、宮殿として朝元殿、崇礼殿などが文献にみえる。朝元殿は太極殿相当の宮殿といわれる。月城の東北方向に臨海殿・東宮、西北の瞻星台付近で官衙とみられる建物群が見つかっている。朝元殿のような中枢の宮殿は、月城内に存在したものとかがえられる。京の北の城東洞遺跡は「北宮」にあてられる。

本報告は、最新の発掘成果をふまえたものである。近年、慶州の新羅王京の発掘調査が進められているが、開発のことごとくに対処して調査がなされているとはいえない。慶州盆地の地下には、王都が埋もれている。今後の発掘調査とともに、これまでの慶州博物館敷地内や東川洞遺跡など王京関連遺跡の調査報告書などの刊行に期待される。

（徳島大学総合科学部）